

16. 身近な環境

生活科は、子供の生活圏を学習の場とします。直接体験すること、例えば、見たり、聞いたり、触れたり、作ったりといった具体的な活動が学習の中心になるからです。したがって、子供にとって身近な環境（もの・人・こと）が学習の対象となるのです。

また、生活科では、社会や自然を外から客観的に見つめるのではなく、自分もそこに生活する（構成する）という生活者の立場から考えていくことを大切にします。このことが、対象と自分とのかかわりで捉えていくということなのです。

身近な環境とは

身近な環境とは、子供のまわりを取り巻く「もの・人・こと」を指す。生活科の学習において、具体的には、学校の施設や人々、地域の施設や人々、家族、栽培する植物、飼育する動物、牛乳パックやペットボトル、ダンボールなどの身近材など、子供が直接見たり、聞いたり、触れたりできるものである。

生活科では、社会や自然を一体的に捉えて活動することが大切である。子供のまわりを取り巻く身近な環境を丸ごと相手にするのである。そして、それらとのかかわりの中から様々な疑問や発見、気付きを得て、活動を広げたり、深めたりしていく。

<身近な環境だから…>

- ・直接かかわることが可能である。体験的な活動を可能にし、実感的な学びができる。
- ・かかわることによって得た知識と生活とが結びつく契機となり得る。学習した知識が生活と結びつき子供の中で総合化されて生きたものになる。
- ・事実をよく捉えて考え、子供なりに意味を構成したり、表現したりすることによって、そのような中で対象へのはたらきかけ方やものの見方・考え方を学んでいくことができる。

生活科は、このような学びの現場を提供することができる教科なのである。